La Campanella
ら・かんぱねら

「夢があれば」 生きていける

～映画完成までの全記録～

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

海苔養殖という
過酷な仕事の傍ら
ピアノを練習し続け
夢を叶えた男がいた。

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

会長　陣内　芳博

記録誌発刊に当たって

編集長　　北村　和秀

もし、この出会いが無かったら、映画製作はなかっただろうと思った。それに気付いたのは、映画「ら・かんぱねら」の完成試写を東京調布市にある角川大映スタジオで鑑賞した時でした。

映画のメガホンを握った鈴木一美監督が、偶然にもYouTubeから聞こえてくるピアニストのフジコ・ヘミングさんと海苔師の徳永義昭さんが、リストの難曲「ラ・カンパネラ」を協奏しているシーンが眼に入った時、監督は感動で身が震え「映画にしたい」と思ったと話しました。そして、直ぐに行動を起こし「夢があれば」必ず叶うと川副町の徳永さんの自宅へ！ 直ぐに快諾して頂いたそうです。しかし、不安がありました。海苔養殖の事を知らないままでは構成も出来ないと、有明海の海苔養殖の実態をつぶさに調べるため体験を積み重ね台本を仕上げて行きました。併せて関係各所へ想いを伝えながら協力を求めて3年が経ったころ、映画製作のために物心両面からサポートしてくれる川崎賢朗さん、川原常宏さん、鐘ヶ江留美子さんの3人を紹介され、次のステップへと発展したのです。

その通り3人は素早く行動に移し、友人や地元財界の人たちを取り込み映画「ら・かんぱねら」を支援する会を発足させます。映画作りへの偶然が夢に挑戦する一歩を踏み出し「佐賀モデル」とまで言われる程、県民からの支援の輪が拡大して行きます。一方、台本も決定稿が出来上がり、映画製作スタッフや役者が次々に佐賀入りし、クランクインを待つばかりとなり、支援する会のメンバーも期待に胸が膨らんできます。県内のロケ地では、有明海の海苔養殖のシーンから海苔小屋までも準備を完璧に行い、撮影が深夜に及んだら温かいスープでひとときの安らぎを演出して場を慰める。佐賀人らしい献身的で心からのおもてなしをする姿です。

最大の功績は、支援する会の全員が協賛金を集めに東奔西走し、企業や個人などから善意の金が集まり、エンドロールにその活動の結果が映し出される。また、上映が始まれば大盛況の中、案内係を積極的に手伝い混乱なく整理していく。この絶え間ない努力を総じて「佐賀モデル」と言い、他の地方での事例はありません。

それに答えるように、役者の皆さんが頑張ります。徳田時生役の伊原剛志さんは、主役が決まった9月から毎日6時間以上のピアノのレッスンに挑み、6ヶ月後のクランクインには「ラ・カンパネラ」を完璧に弾けるようになってました。その上、海苔養殖で難しい支柱立てを素手で実演する。また、佐賀弁のセリフは完全にマスターする。役者魂の一端を垣間見た時、伊原さんの代表作になる気がしました。

徳田家を取り巻く役者も盛り立てた。妻役の南果歩さんは演技が素晴らしく、時々アドリブが飛び出すほど役作りに徹され、佐賀の母の姿そのものを演じられ、息子役の緒形敦さんと父役の不破万作さんも流ちょうな佐賀弁で対応、方言指導の大島一樹さんと江口美智子さんを驚かせました。

また、脚本には謎のピアニストが登場し、現実と違う展開になるが大空眞弓さんの演技力には、ただただ脱帽するばかり。ブラボーと叫びたい。「夢があれば、生きていける」この言葉が鑑賞をした人たちの人生そのものを映し出し、感銘を受け「新たな挑戦は、年齢に関係ない」ことを教えてくれた映画です。有明海の自然と戦う海苔師が、周りから無謀だと言われてもピアノを弾き続ける「夢があれば」必ず叶えられると、本気で「夢」求め、身を持って証明したもので、そこには夫婦の愛があり、家族の愛があるホームドラマで時間の経つのを忘れます。

ラストシーンは、無骨な手で「夢」を掴んだ男が、妻のために無心で奏でる「ラ・カンパネラ」11分に、この映画の素晴らしさを改めて感じました。後は、涙でスクリーンが見えなくなった。感動の真実は、一人のものではなく映画に携わった全ての人たちの汗と努力と行動の賜物だと思います。これらの記録は私たちの遺産として残し、次の世代に受け継がれるものと確信し、佐賀の地に永久保存する事が必要だと考え発刊する事に致しました。

はじめに

事務局長：川崎賢朗、事務長：川原常宏、デスク：鐘ヶ江留美子

この記録誌の作成にあたり、この映画製作のために何が私たち3人を突き動かしたのだろうかと改めて思い起こしてみました。私たちの身近な存在でもある徳永義昭さんをモデルにした映画の話があることを耳にしたとき、ある種の疑いの様なものを抱いていました。そう思ったのは、奇しくも3人とも同じでした。そんな私たちが、何故この映画に関わり始めたのでしょうか。そのきっかけになったのは三人三様でした。

（川崎）ある日の事、友人の紹介で「夢があれば」と言う脚本持参で鈴木という男が訪ねて来ました。数年前から八女に住んでいて、本来プロデューサーだけど今回の映画では監督をするという。手伝って貰えるものだという確信で熱弁を振るう、本当に厚かましい男である。友人から映画の話がある事は聞いていました。友人とは海苔漁師でリストの「ラ・カンパネラ」を独学でマスターした親友、徳永義昭くんの事である。彼とは同級生で小中高と一緒で、海苔漁師になってからは、最も信頼が置けて、腕を競いあう強烈なライバルでもある大親友です。だから家族の事、ピアノを始めたきっかけも、上達して行くさまも、全部知っていました。義昭くんの奮闘、努力の様子が映画になるなら、封切りの日には、いの一番で観るつもりだったのです。それがまさか、支援する会の事務局長としてどっぷり関わる事になるなんて夢にも思っていませんでした。鈴木監督は、2年間脚本を書き直しながら頭を縦に振らない私の家に幾度となく尋ねて来られました。僕は逃れようと1番信頼の置けて映画に興味がありそうな友人川原君を紹介しましたが、台本を読んだ川原君は大乗り気になり、今度は鈴木監督と2人で僕を説得し始めたのでした。その時1番背中を押したのが川原君の奥さん、麻子さんでした。ウチの旦那と一緒に映画作をして欲しいと説得され参加する事を決断しました。今は、その決断が間違いではなく、むしろ人生で一番充実した時間を過ごす事が出来たと感謝しています。

（川原）大親友であり大きな信頼を寄せている海苔師、川崎賢朗さんの紹介で鈴木一美監督とお会いすることになりました。そこで渡された初めて見る台本、そして、徳永さんをモデルにした映画ということの興味もあり、すぐに台本に目を通しました。読み進めていく中で心が動かされ最後には涙していました。「この映画が本当に完成し、映画館の大スクリーンで佐賀や有明海の漁場の風景や海苔養殖の様子が映しだされたら、凄いことだ！ 多くの人々に佐賀の魅力を伝えることが出来る！」との想いがきっかけとなり、この映画に大きく関わることになりました。

（鐘ヶ江）鈴木監督よりこのお話をいただいた時、私は主人を亡くし人生が180度変わるほどの出来事に直面し、普通の生活が出来ずにいました。そんな私に鈴木監督は、「寝る時間も削り、土日もなく、毎日帰宅が遅くなると思う。だけど人生80年の内たったの2年、そんな日々があっても良いと思うし、完成した時の感動は言葉では言い表せないものがあるから」と。そこで、1年放っていた台本を読んでみたところ、驚くことに活字から情景や音、色や匂いまで伝わってきて「ら・かんぱねら」に入り込んでしまいました。その夜、私はすぐ子供達に相談。「このままだと先が心配、絶対やった方が良い」と、二人で背中を押してくれました。これが私が映画に関わるきっかけです。

この様に、それぞれ異なったきっかけや想いを持った3人が、鈴木一美監督から引き寄せられる様に集まり、2023年6月監督を含む4人の想いがひとつになりました。ここからこの映画製作実現のために動き出し、各所への挨拶まわりが本格的に始まりました。しかし、製作費1億5千万円という莫大なお金を集めるためには、私たちだけがどんなに頑張っても叶わないこともわかっていました。行政はもちろんのこと、漁業、農業、商工業や各種団体、そして県民の多くの皆さまの力を借りないと実現することが難しいことを。その後、組織づくりへと。

皆さんは、エンドロールに止めどなく映し出される、事業所や団体、そして個人など様々な方のお名前をご覧いただいたでしょうか。その他に本当に多くの皆さまの善意の力が集まり、この映画を完成しました。まさに佐賀県民の映画の誕生です！

ここに至るまで私たちは、この映画にある不思議な「縁」や「運」を感じてきました。商工会議所の陣内会長へ相談するきっかけとなったのも「縁」が導いてくれました。いろんな場面で不思議な「縁」がつながり、立ちはだかる壁を間一髪で乗り越え、結果オーライと思うような「幸運」な出来事も数えきれないほど。「この映画持ってるよね！」という言葉を何度口にしたことか。

また、協賛金の振込口座がやっと開設し、撮影を2ヶ月後に控えた2024年1月のこと、この映画の幹事会社となる京映アーツの鈴村社長（現在、会長）と陣内会長を含む私たちは、大きな決断をすることとなりました。撮影チームは3月からの撮影に向け既に半年前からスケジュール調整を行い、万全の準備を進めていましたが、協賛金を集めるための郵便振替口座の取得に3ヶ月もの時間を要し、資金集めもまだこれから。この状況でこのまま映画製作を進めて行けるのか、半年もしくは1年延期するべきではないかという、崖っぷちでの最終判断を強いられました。結果、京映アーツの鈴村社長の英断に陣内会長と私たちも賛同し、映画製作を進めることになりました。

この時の紙一重の判断もあり映画が実現に向かって動き出したことも、記録に残しておくべき重要なターニングポイントでした。もしあの時、延期の判断がなされていたら、おそらくこの映画は生まれていなかったことでしょう。

この様に、これまでに前例が無い様な状況下で、この映画は新たな地域発の映画製作の「佐賀モデル」として進みはじめ、人々を巻き込みながら地域へ浸透して行きました。そこには、支援する会の仲間たちが、それぞれの仕事の合間や休日を削り、資金集めから準備、撮影、そして上映に至るまで時間を惜しずサポートを行ってくれました。その結果、撮影スタッフやキャストそして地域がひとつになって映画が完成したのです。そこには、私たちのふるさとの今の風景が映像として刻み込まれ、今後何十年、何百年と残り続けていきます。皆さんのお名前も同じようにしっかり刻み込まれています。この映画が佐賀を代表する映画として後世に残り続けてくれることを願っております。そして、この「佐賀モデル」が、今後の地域発の映画製作の一助となれば幸です。

おわりに、私たちはこの映画に関わることができたことで、かけがえのない多くの仲間たちと出会えました。この仲間たちひとり一人が、この映画「ら·かんぱねら」の陰の立役者でもあります。

みんなで作り上げた映画です

映画「ら・かんぱねら」のモデル
海苔師　　徳永　義昭・千恵子

徳永義昭プロフィール

昭和35年、佐賀市川副町生まれ。昭和54年、家業の海苔養殖業に就き、海苔師となる。海苔加工業「徳永水産」を経営。特殊特定小型船舶操縦一級免許及び無線局免許を取得。現在は、妻・長男・長男の妻・孫の5人家族。

度々マスコミに取り上げられ全国に知れ渡るようになった現在も海苔師の仕事とピアノを両立しながら、小・中学校などの教育現場や講演会で「ラ・カンパネラ」を披露。さらに手品やトークをまじえてのコンサート活動を展開。「新たな挑戦に年齢は関係ない、夢は追いかければつかむことができる」と、更なる夢を追いかけている。

映画を作って頂いた皆さんの努力で、この映画が完成したと気付いたとき、込み上げるものを全身で感じ取りました。これまでの出来事が走馬灯のように思い出され、映画のシーンごとに皆さんたちの努力がヒシヒシと伝わってきました。

改めて、製作スタッフや豪華な俳優陣、そして支援する会の皆さんの結集した力が成しえたものだと思っています。本当にありがとうございました。

最初にこの映画を観た時には、この「ら・かんぱねら」は、俺がモデルの俺の映画だと思っていました。そいばってん、この映画は、支援する会の人たちが自分の仕事がありながらもボランティアで活動する姿。伊原剛志さんが猛特訓して、ピアノを吹き替えなしで演奏する、そしてメークなしで有明海での作業に打ち込んだ役者魂や南果歩さんの可憐な演技で佐賀の母親を見せて頂いたら「こい、ぜったい俺の映画じゃなか、皆さんが作り上げた映画だ」と確信しました。

特に、全てのキャストや撮影スタッフの皆さんには、申し訳ないですが、この映画を支え、縁の下の力持ち的存在だった支援する会の皆さんの映画だと思いました。本当に感謝しかありません。

海苔の養殖は、その時その時で頑張るしかなかとばってん、この映画を大勢の人に観て頂くためには、夏場の閑散期には、全国の色んな所を回りコンサート開いて、皆さんからチャホヤされるように目標を持って頑張るつもりです。今後のご支援を宜しくお願い致します。

[千恵子さんのコメント]

主人同様、製作スタッフ、俳優の皆さん、そして支援する会の皆さんに感謝申し上げます。特に、南果歩さんには、私の役をやって頂き本当にありがとうございました。この様に素晴らしい映画になるとは思いませんでした。ありがとうございます。

映画「ら・かんぱねら」台本

映画への名義後援と推進団体

（名義後援）

佐賀新聞社
西日本新聞社
朝日新聞社
毎日新聞佐賀支局
サガテレビ
NBCラジオ
FM佐賀
ぶんぶんテレビ
えびすFM
共同通信社佐賀支局
時事通信

（推薦・推奨する団体）

佐賀県商工会議所連合会
佐賀県有明海漁協協同組合
佐賀県商工会連合会
佐賀県私立中学高等学校協会
全国町村会
佐賀県市長会
佐賀県町村会
佐賀県菓子工業組合連合会
佐賀県酒造組合
佐賀県音楽協会
佐賀新聞社
サガテレビ
東京佐賀県人会
関西佐賀県人会
福岡市佐賀県人会
JA佐賀県農協中央会
佐賀市観光協会

支援する会・県民の皆さんに感謝

映画「ら・かんぱねら」製作配給委員会
代表　　鈴村　髙正

プロフィール

1955年(昭和30年)生まれ
株式会社京映アーツ代表取締役会長
ゼネラルプロデューサー
装飾プロデューサー
映画功労部門で文化庁映画賞を授与

代表作

高倉健の最後の作品「あなたへ」
福井県鯖江市での「おしょりん」
八女市での「野球部員演劇の舞台に立つ」

映画スタッフとして、約半世紀、共に歩んできた鈴木一美が初監督をする事になり、製作配給委員会の代表を務める事になりました。

今回、佐賀で映画を撮るに当たって心配な点がありました。まずは、撮影のための資金の調達です。県民80万人ほどの人口でどれだけの製作資金を集められるのかということでした。不安が過る中、映画「ら・かんぱねら」を支援する会が発足し、会長に佐賀商工会議所の陣内芳博会長が就任していただき、県内の企業に訴える体制と佐賀県有明海漁業協同組合が、全面的に支援する組織が確立しました。

私事ですがクランクインの安全祈願祭の後、体調を崩し入院する事になりましたが、事務局の中心になる川崎賢朗事務局長他、支援する会のメンバーが東奔西走し、協賛金1億2000万円を集めていただくことができました。

撮影に関しても海苔漁師のほか大勢の佐賀県民の皆さんが、漁船の手配からセットの準備、朝昼夕の食事、そしてエキストラ出演に至るまでオール佐賀で映画づくりが行えました。

お陰様で自信を持って日本全国の皆さんに鑑賞して頂ける映画が出来上がり感謝に絶えません。ありがとうございました。

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
記念誌に寄せて

映画「ら・かんぱねら」
監督　　鈴木　一美

「ラ・カンパネラ」はイタリア語で「鐘」ということは、映画の中で紹介しましたが、さて、フランツ・リストが何故この曲を編曲したかというとは余り知られていない。

かつてクラシック音楽はヨーロッパの貴族社会だけのものだった。その後の産業革命によって社会構造が変化する中で生きたリストは、原曲の「パガニーニのバイオリンソナタが特別な人たちのもの」だったものを、大衆の為に、ピアノだけで交響楽に聞こえるよう編曲したものだった。今では原曲のパガニーニよりも編曲したリストの「ラ・カンパネラ」としての名前が世間に通っている。

リストは身長2メートル近い巨人であったらしい。当然手も大きく彼が奏でる「ラ・カンパネラ」は、さぞや豪快で迫力のあったものだったに違いない。そしてモデルの徳永義昭さんは海苔漁師の中でもひときわ指の太く大きな人である。手の大きな音楽家の情熱が時を超えてフジコ・ヘミングの演奏へと受け継がれた結果、指の太い徳永さんが「ラ・カンパネラ」を弾きたいという衝動へと繋がってきたと思われる。あくまで私の妄想ではあるがそんな因縁めいたものを感じてならない。

さて、俳句に二物衝撃という技法がある。17文字の上五と下五の言葉が対極にあると、その言葉がぶつかって中七に影響を及ぼして、化学反応(窯変)が起き予期せぬ世界が出現する。徳永さんの実体験は、映画化を企画する題材としてとてつもなく魅力的なものであった。俳句になぞられると上五が製作配給委員会つまりロケスタッフとキャスト、下五が映画「ら・かんぱねら」を支援する会、中七は上五と下五の衝突つまり融合によって、脚本を超えた窯変を起こして、誰もが見たこともない佐賀の映画が誕生してしまった。たぶんですが、大きな手と太い指の2人でこの映画を支援する会の皆さんを突き動かしたとしか思えません。

完成に至るまでの支援する会の皆様のご尽力は、凄まじいエネルギーとなって映画完成まで導いてくれました。まさしく二物衝撃(窯変)が映画完成どころか、この映画の寿命年数を5年から20年も延ばしてくれました。2025年1月31日イオンシネマ佐賀大和の封切日を皮切りに九州全県から北上して北海道まで到達して後、2次上映で国内のローカル映画館と同時に学校上映やホール上映へと繋がっていきます。

私はこの映画を企画した責任として、これから先時間をかけて「佐賀の映画」を国内隅々まで上映してまいります。本当に協賛金集め、撮影準備、撮影現場のエキストラや炊き出し、試写会等と惜しみないご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

皆様のお名前はもれなくエンディングに記載されております。これを自分の関わった記念映画として記憶に留め置いていただければ幸いです。

映画が完成するまでの全記録

年 表

2012年	徳永義昭さん(52)　フジコ・ヘミングさん演奏の「ラ・カンパネラ」に感動
2019年　2月　3日	徳永さん(58)　NHK「おはよう日本」で海苔漁師のピアニストとして紹介
2020年　1月　8日	徳永さん(59)　TBS「あんたの夢かなえたろか」で、フジコ・ヘミングさんの前でラ・カンパネラを演奏
	偶然にYouTubeで観ていた鈴木一美監督が映画の企画を立案
	その後、佐賀市川副町の徳永邸を訪問、映画化に協力を要請
2023年（令和5年）	
1月17日	鈴木一美監督が川原賢朗さんの紹介で川原常宏さんと初めて会う
2月20日	鈴木監督、ロケ地などの視察を始める
4月12日	鈴木監督の映画づくりの要請を川崎賢朗さんら了承する
5月18日	以降、映画製作の要請と協賛金への理解を訴えていく
5月28日	（株）アイワンへ実景撮影の協力要請
6月13日	鐘ヶ江留美子さんが加わり発足の3人衆が揃う
6月27日	鈴木監督、映画製作のために佐賀市に移住
8月　2日	活動資金として（株）京映アーツより100万円を借用する
9月　1日	JF佐賀県漁協やJA佐賀県農協などに要請活動始める
9月　7日	佐賀商工会議所の陣内芳博会長へ支援する会会長の就任を正式要請
9月　8日	佐賀市の坂井市長に支援を要請
9月10日	鈴木監督、川崎賢朗さんの有明海での海苔養殖の作業を視察
10月　3日	支援会のパンフレットを発注
10月　3日	映画タイトルが「夢があれば」から「ら・かんぱねら」に変わる
10月　4日	一回目のスタッフ会議を開催、協賛金1億5千万円を目指す事が確認
10月16日	映画「ら・かんぱねら」を支援する会の理事会が方針を承認
	その後、支援する会の発会式を開催、マスコミが大々的に報道
10月23日	丸池カメラマン佐賀入りして、実景撮影を開始する
10月24日	支援する会と製作スタッフとの懇親会

年 表

10月31日　活動の拠点、支援する会事務所、リニューアル工事
11月 1日　主演の伊原剛志さんへビデオレターをお送る
12月 2日　伊原剛志さん初の佐賀入り。支援する会と懇親会
12月 4日　支援する会のポスター・カードが出来上がる
　　スタインウェイのピアノが見つかる
12月20日　佐賀県知事に表敬訪問
12月22日　クラウドファンディング開始
12月23日　佐賀駅などでデジタルサイネージでPRを開始
12月26日　佐賀市長表敬訪問
2024年（令和6年）
1月10日　柳川市長表敬訪問
1月12日　佐賀県庁へ支援を要請
1月17日　製作：鈴村代表と支援する会：陣内会長、事務局とのトップ会議
2月 1日　メインロケハン佐賀入り
2月 6日　海苔の入札の実景撮影
2月10日　福岡市でオーディション（2日間開催）
2月13日　サガテレビ・NHK佐賀・ぶんぶんTVへPR出演
2月14日　演出部・製作部が佐賀入り
2月23日　佐賀商工ビルでオーディション（応募者500人以上／2日間開催）
3月14日　川副町海童神社で映画の安全とヒット祈願祭

3月17日　クランクイン・戸ヶ里漁港を皮切りに有明海での撮影が始まる
3月22日　佐賀市内のパチンコ店で大負けしたシーンの撮影
　　佐賀県漁協・共販センターでの親子喧嘩に仲裁する母のシーン
3月24日　川副町ラポールでの撮影でモデルの徳永さん夫婦が出演
3月29日　佐賀市の佐賀東高校で高校時代の思い出のシーンの撮影
3月30日　富士町の（株）富士建設が美術担当によって「山口旅館」に変身
　　嘉瀬川ダムの植林作業シーンで、大漁旗が掲げられ撮影
3月27日　川副町で主役の自宅を想定した撮影が始まる
4月 2日　佐賀城公園とさがレトロ館での撮影で大空眞弓さんの演技に皆が感動

年 表

4月　3日　　柳川市の小川楽器柳川店で店内シーンを撮影
4月　4日　　佐賀市の浪漫座でエキストラ100人による撮影
4月　7日　　白石町の佐賀修道館道場で剣道シーンを撮影
4月11日　　クライマックスシーン撮影！深夜に響き渡るピアノの音色に皆が涙した
4月12日　　クランクアップ・川副町の海苔小屋で支援する会から花束贈呈など
　　夜は、俳優や製作スタッフと浪漫座でお疲れさま会で慰労
　　NHK佐賀・KBC九州朝日放送など夕方のニュースで速報
4月23日　　サガテレビでロケ終了までを特集し放送
5月31日　　東京の角川大映スタジオでオールラッシュを披露
6月　1日　　関西佐賀県人会総会で川崎・川原・鐘ヶ江による支援依頼
6月18日　　福岡市佐賀県人会総会で川崎・川原・鐘ヶ江・北村・鈴木監督による支援依頼
7月　6日　　協賛775件のエンドロールデーターを製作チームへ提出
7月14日　　サックス奏者、坂田明さんによる映画音楽録音開始
7月22日　　イオンシネマ佐賀大和の松田総支配人と打合せ
7月26日　　映画「ら・かんぱねら」が遂に完成！
7月30日　　アドバイザーの内田俊彦さん死去
8月13日　　製作関係者30人が集まり、完成試写会。終了と同時に拍手が沸く
9月　4日　　製作配給委員会の桑山プロデューサーと支援する会合同会議
9月19日　　記録誌の編集会議立ち上げ
9月25日　　東京の京橋テアトル試写室で試写会
9月29日　　古湯映画祭で30秒のコマーシャルを初披露
10月11日　　イオンシネマ佐賀大和で支援する会向けの特別披露試写会を開催
10月12日　　漁業者、海苔関連企業を対象とした特別披露試写会を開催
10月15日　　イオンエンターテイメントと上映契約
10月19日　　東京佐賀県人会総会で川原・鐘ヶ江・北村・鈴木監督・桑山PによるPR活動
11月17日　　佐賀市文化会館で完成披露試写会。キャスト舞台挨拶、1,200人が鑑賞
2025年（令和7年）
1月24日　　「ら・かんぱねら」ウィークとして、テレビ・ラジオ・新聞で告知展開
1月26日　　佐賀新聞に映画「ら・かんぱねら」の全面広告が掲載
1月31日　　イオンシネマ佐賀大和で先行上映開始。以後、大盛況
2月13日　　観客動員数が1万人を突破

思い出の一枚

伊原剛志さんへのラブコール

初回の支援する会メンバー

発会式後の記念写真

海童神社での祈願祭

ロケの合間、不破万作さんを囲んで

戸ヶ里漁港での記念写真

携わった皆さんに感謝

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
会長　　陣内　芳博
（佐賀商工会議所連合会　会長）

お陰様で、やっと映画が完成しました。完成に至るまで俳優の皆さん、製作スタッフの皆さん、ボランティアの皆さん、そして多くの浄財を出して頂いた支援者の皆さんに支えられて出来た映画だと思います。

私は、支援する会の会長を務めていますが、完成した要因は、支援する会の皆さんのお陰だと思っています。全員の名前をひとりひとり呼んで慰労の言葉を送りたい気持ちでいっぱいです。仕事の傍ら、真剣にまじめに訴え続け映画完成にこぎ着けた努力に、ただただ感謝するしかありません。映画は2時間ですが、2時間を感じさせない程あっと言う間に終わった、素晴らしい映画に仕上がっています。

この映画は、過酷な海苔養殖を営む傍ら独学でピアノを練習し、夢を叶えた徳永義昭さんをモデルにした映画「ら・かんぱねら」です。主役の伊原剛志さんも徳永さん同様に猛特訓して、「ラ・カンパネラ」を弾けるようになり、ピアノへの想いをスクリーンいっぱいに表現し、熱いものを感じました。また、妻・千恵子さんをモデルとした奈々子役の南果歩さんも流暢な佐賀弁で対抗し、真に迫る演技には圧倒されました。そこには、家族愛や夫婦愛が巧みに表現されていて、佐賀を大切にする心がしっかりと伝わります。有明海に広がる海苔棚の素晴らしい風景と共に海苔が出来上がるまでの過程が描かれて、大切な宝の海をこれからも守って行かなければならないと感じました。

そして、子供たちの多くが夢を語る事が少なくなった今日、青少年育成の教育的な観点からも「夢があれば」夢に向かって努力すると「夢が叶う」と教えてくれる訴えた映画でもあります。

多くの観客の皆さんにこの映画を見て頂いて、その感動を友人、知人を含め伝えて頂く。それが、全国展開への一歩でカギになります。大きな話題となり、佐賀から発信した映画「ら・かんぱねら」が全国至る所で支持と共感が得られることが出来ると確信しています。そして、大勢の人に感動と夢をもたらします。

徳永さんの姿勢に心打たれた映画

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
副会長　　西久保　敏
（佐賀県有明海漁業協同組合 代表理事組合長）

私たち海苔漁師の仲間である徳永義昭さんが、努力に努力を重ねながらも「ラ・カンパネラ」という難解な曲を自分のものにしていかれる生き様を映画で拝見しました。その姿や姿勢には、本当に心を打たれ響くものでした。私には到底真似が出来ないことです。

令和4～6年度は、過去に経験したことのないような海苔不作を経験し、漁業者が一致団結して一生懸命海苔づくりを行いました。

映画でも海苔養殖の「あるある」を見事に表現され、支柱建てなど有明海ならではの養殖方式や、海苔の製造風景など、海苔を知らない皆さんにも、ご理解いただけるのではないかと思いました。

また過酷な養殖現場で、昼夜を問わない作業の現場感と、それに加え、疲労困憊の中で曲の練習に励まれた主人公徳永さんの人間らしい一面も見られました。

この映画を通じて、佐賀の地域風土、海苔養殖や、その技術、更には佐賀海苔がなお一層、世の中に知れ渡ることを期待するものです。

伊原剛志さんと南果歩さん演じる夫婦関係が本当にほほえましく、まるで我が家？？のようでした。（笑）

映画鑑賞された方は、きっと夢や挑戦を後押しされ、常に背中を押してくれる作品になるものと思います。
ぜひ一度は鑑賞して欲しいものです。

ら・かんぱねらへの想い

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
理事　　大島　信之
（佐賀県農業協同組合中央会　代表理事組合長）

主人公の徳田時生(伊原剛志)は、ピアノの教育も受けておらず、独学で超難曲リストの「ラ・カンパネラ」を極めようとする熱意が感動的であり、まさに奇跡の人と言っていいと思った。

農産物を生産する農家の姿は、過酷な労働の反面、仲間や身内との絆がいかに大切かを知らされるが、映画での漁師の実生活と人間模様が上手く描かれていた。

物語は、パチンコにのめり込むほどグータラな時生の生活から始まり、元ピアニストの石田秋子(大空眞弓)という人物との出会いが大きな転機になっている。「必ずラ・カンパネラを弾けるようになって、老人ホームに来て弾いてほしい」という約束をする。挫折に悩む時生に再び情熱を吹き込ませた秋子は、奇跡に至らしめる重要な存在であった。大女優、大空眞弓の大らかな演技も冴えている。妻、奈々子(南果歩)から、変人扱いされる時生とすれ違いは当然あるものの、これぞ夫婦愛というほどに時生への愛情の深さを感じさせた。

「夢があれば何でもできる。自分（徳田時生）にしか弾けない、ラ・カンパネラ」を妻に聞かせるため、妻の誕生日までに弾けるようになった。これまでの苦悩を知り尽くしていて、演奏を眺め涙ぐむ妻役の南果歩の演技は、この映画を象徴させるほど感動的だった。

キャストの演技力もさることながら、有明海や麦畑の情景が頻繁に使われる。また、佐賀弁は翻訳を付けなければならないほど流調で佐賀らしい映画になっていた。

望むことは時生さん、家族や仲間がいての人生である、本業の海苔業が疎かにならないようにしてください。

最後に、夢を叶える事が身近に感じる映画として、皆様にも鑑賞いただければ幸いです。

郷土愛あふれる映画に魅了

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
理事　　峰　英太郎
（佐賀県商工連合会　会長）

佐賀市の文化会館で行われた完成披露試写会を鑑賞しましたが、想像していた以上の作品に仕上がっていて驚きました。川副町の戸ヶ里漁港などで「どぶろっく」が出演する場面もあるなど、遊びごころも感じられ楽しく観ることができました。

特に、主人公でモデルになった海苔師の徳永義昭さん役の伊原剛志さんも同じように、ピアノに対してのどん欲な姿勢が映画全体に生かされ大変すばらしく、また佐賀弁も堂に入っていたし、その上ユーモラスな場面の演技が本当に上手でした。また、妻・千恵子さん役の南果歩さんも流暢な佐賀弁で対応し、その場面場面で夫婦愛が大変よく伝わり、さすがはプロという印象でした。全体として、「佐賀らしさ」が存分に出た作品となっていましたが、東京の方などが見られたとき、方言の意味が伝わるのか少しだけ心配です。

郷土愛あふれるこの映画をご覧いただき、多くの皆様に佐賀の魅力を感じていただけることを切に願います。

努力すれば夢叶う、皆さんが賛同

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
理事　　福岡　桂
（佐賀県中小企業団体中央会　会長）

私は川副町出身で、子供の頃は家のまわりに多くの海苔師さんがいらっしゃった。

テレビで佐賀の海苔漁師さんが独学でピアノを練習して難曲の「ラ・カンパネラ」を演奏できるようになり、フジコ・ヘミングさんの前で披露するという番組を観て、凄い人がいるなと思っていた。大変失礼だが、私の知っている漁師さんのイメージとはまったく違うものだった。

その人をモデルにした映画が作られるとお聞きして、正直、本当に出来るのだろうか、大変そうだなと思っていた。

昨年ご縁があり、映画「ら・かんぱねら」を支援する会のメンバーに加えて頂いた。その時に、モデルの徳永さんが私と同じ年だとわかり親近感をもった。映画の撮影をサポートする方々の熱心な活動にも頭がさがった。自分のできるお手伝いをと思い、お知り合いなど多くの人に資金援助（協賛金）のお願いをさせて頂いた。

この映画は佐賀の風景や、海苔漁の厳しさ、努力すれば夢は叶うなどのメッセージを伝える映画だとお伝えして、多くの皆さんから賛同、ご協力を頂いた。

試写会で映画を観て、都会にはない佐賀の風景の素晴らしさ、日頃、なにげなくパリパリと簡単に食べている海苔をつくる漁師さんの仕事の厳しさ、同じ仕事をする親子関係の難しさ、夢をもって努力すれば夢は叶うということを改めて教えられた。

素晴らしい支援する会のメンバーに加えて頂き感謝している。是非、多くの皆様に観て頂きたい。

温かさと優しさが心地よい

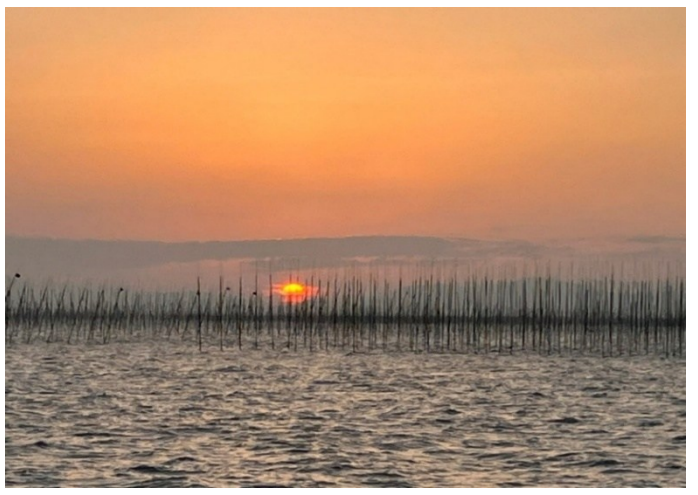
映画「ら・かんぱねら」を支援する会
理事　　牛島　英人
（一般社団法人　佐賀市観光協会　会長）

主人公の海苔師・徳田時生の「夢」に向かいひたむきに挑戦する姿と、それを支えた家族の「愛」の物語に、「人間、強く思い続ければできないことはない」「新しい事を始めるのは、遅くない」と挑戦する一歩を踏み出す勇気をくれる、この映画「ら・かんぱねら」に感動しました。何よりも映画全体にわたって伝わってくる“あたたかさと優しさ”が大変心地よく後に残りました。

将来への不透明感を感じる中、成果やそれを獲得する効率性が重視されがちな昨今にあって、人間的な大切な事を思い起こさせられた気がします。

また、本作品では、撮影の殆どが佐賀で行われ、多くの佐賀の方々の協力で完成した事は、これまでにない大きな価値ではないでしょうか。

観光に携わる者として、「有明海の大自然」「過酷な海苔漁」「佐賀の名所・名産」「佐賀の人々の温かさ」「佐賀のことば」が盛り込まれ、佐賀市の魅力を多くの方に知って頂く事ができ、大変嬉しく思います。



本作品の製作にご尽力頂きました関係者の皆様の思いと努力に心からの敬意を表しますと共に、この映画「ら・かんぱねら」が多くの方々に届き、幾久しく記憶と心に残る事を祈念しまして、お祝いのことばと致します。

映画を通じて佐賀の魅力を発信

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
理事　　吉村　正
（佐賀市南商工会　会長）

傍から見ると平凡に見える日常も、当事者にとっては決して平坦ではありません。映画「ら・かんぱねら」は、そんな日常に潜む人生のドラマを美しい映像とともに見事に描いています。

佐賀県の海苔漁師である主人公が、独学でリストの超難曲「ラ・カンパネラ」のピアノ演奏を成し遂げたという物語。そのシンプルなストーリーの背後には、海苔漁師という過酷な職業の日常、親の介護、妻の体調不良、後継ぎ息子との親子の絆といった現実が丁寧に描かれており、観る者の心を揺さぶります。

物語の軸には「なぜピアノを弾きたいのか」という問いが存在します。その答えにたどり着いた瞬間の清々しさは、映画のクライマックスとして心に深く刻まれるものです。

さらに、この映画は佐賀県という地域の魅力を存分に発信しています。海苔漁師の仕事が描かれるだけでなく、佐賀市の自然豊かな風景や特産品、地元川副町を中心に実在の店舗が数多く登場し、地元の息遣いを感じさせます。

映画「ら・かんぱねら」を通じてこうしたご当地の魅力が発信されることで、佐賀県に多くの人が訪れ、地域経済の発展や観光振興につながることを願わずにはいられません。

佐賀の未来にさらなる活気が訪れることを祈りつつ、皆様にもこの映画をご覧いただければ幸いです。